

## 欧州インフラ事情視察 ～肌で感じたヨーロッパの歴史と息吹～



国際航業株式会社  
東日本事業本部 第二技術部/砂防グループ

藤原 伸也  
Fujiwara Shinya

### はじめに

平成25年度建設コンサルタント業務・研究発表会において、私は幸運にも優秀賞を賜り、その副賞としてこのたびの欧州インフラ事情調査に参加させていただいた。私は普段はおもに火山防災関連の業務に携わっており、正直なところ都市計画やインフラ整備関係については見識が浅く、ましてやヨーロッパの視察となると、どうなってしまうか少々不安を感じていた。しかし、それは全くの杞憂であり、このたびの視察は逆にその見識の浅さが、より大きなインパクトを私にもたらしてくれたと思っている。旅程10泊12日という長旅であったが、ここではその中でも私が強く印象に残った都市について振り返り、紹介させていただきたいと思う。

### ナポリ ～2,000年前の遺跡から発掘された高度な文明～

火山関係者がナポリと聞くと、すぐに連想するのがヴェスヴィオ山である。ナポリ空港に降りたときはあいにくの曇り空であったが、ヴェスヴィオ山はその綺麗な裾野を私たちにを見せてくれた。ヴェスヴィオ山は、西暦79年の大噴火が有名であり、その噴火の様子を小プリニウスという人物が手紙の形で記している。そしてこの書物は、火山現象を記述した世界最古の書物として知られている。

さて、ナポリで訪れたのは、その79年噴火の際に噴出した火砕流によって埋もれてしまったポンペイという都市から後に掘削調査で発見された品々を展示している国立考古学博物館である。この博物館内では、当時の人々による絵画や彫刻な



写真1 復元されたポンペイのミニチュア



写真2 ツェルマットに見られる電気自動車

どの芸術作品が極めて目を引くが、中には今でも使えそうなピンセットなどの医療器具、水道管などが発掘されており、2,000年前には既に医療・インフラ整備が高度に進んでいたことに驚かされた。また、館内にはポンペイ遺跡全体のミニチュア模型が展示されており、その整然とした町並みは現在のヨーロッパにも通じる場所がある。さらには、闘技場や競技場といった娯楽施設も用意されていたことも非常に興味深かった。

残念ながら、今回はポンペイ遺跡自体を訪問することはできなかったが、機会があればぜひこの遺跡を訪れて2,000年前の息吹を肌で感じ取ってみたい。

### ツェルマット ～環境と景観に配慮した経営～

イタリアの各都市を訪れた後、鉄道を乗り継いでスイスのツェルマットを訪れた。名峰マッターホルンで有名なツェルマットは、住人約6,000人に対し、1日平均5,500人の観光客が訪れるスイスの一大観光地である。駅を降り屋外に出た瞬間、吸い込む空気が今までの都市と明らかに違って澄んでいることに気づく。この村では、世界に環境問題という単語が生まれる前の1960年代からガソリン車の乗り入れを規制しているという、中村



写真3 ツムット地区の景観



写真4 エアフルトの街並み

英夫先生のお話には大変驚かされた。確かに、村内を通行している車両は電気自動車と馬車しか見られない。観光客は4.8km手前のテッシュの駐車場に車を置き鉄道で村に入ることが義務づけられている。いわゆる、パークアンドライド方式であるが、日本国内で採用されている本方式は、都市部の渋滞緩和や観光客を効率よく移動させることをおもな目的としているのに対し、ツェルマットの場合は、環境・景観配慮を一番の目的とすることが大きな特徴である。日本の伝統的な街並みを有する観光地は見習うべき点かも知れないが、これには数年～数十年単位を見越した街づくりの視点が必要であると考えられる。都市政策に限らず、この「長期的な視点」が今の日本に欠けている点ではないかと気づかされた。

なお、ツェルマットを歩いていると、電気自動車は走行音が静かなため、後方から近づいてきていることに気づかないことが多いが、クラクションを鳴らされることは一度もなく、あくまで「歩行者最優先」の姿勢が貫かれていた。住民の間でしっかりとビジョンを持って街並みを守り地域経営を行っていることに、改めて感心させられた。

また、私は滞在中の自由時間にツェルマットの水力発電による電力の供給源となっているツムットダムを見に向かった。ツムットダムは堤高74mのアーチ式のコンクリートダムであり、ここで発電のほか水量調節を行っている。片道1時間半の一人歩きであったが、道中のお花畑やツムット村の風景などは、まさに「アルプスの少女ハイジ」を想起させ言葉に表せない感動を覚えた。

### ドイツ ～整然とした美しい街並み～

ドイツでは立ち寄っただけの都市を含めると、6都市（フュッセン、ミュンヘン、ライプツィヒ、ドレスデン、エア

フルト、フランクフルト）を訪れた。特に、フュッセン、エアフルトの街並みは質素ながらも非常に美しく、印象に残っている。ドイツの都市では、家屋の立地にあたっては配色や屋根の角度等に厳しい制限があり、「ドイツらしい」と言える独特の雰囲気を出されていた。これらの都市では、住宅に奇抜な色を使用することは避けられ、淡い色合いの壁と、赤～茶色系の屋根で統一されている。さらに、住宅の高さも規制があり、整然とした町並みが景観を引き立てており、国や各地域が自分たちの景観を財産として捉え、計画的にまちづくりを行ってきたことがよく伺い知ることができた。翻って日本ではここまで厳しい制限がある都市は多くはなく、多様な住宅が乱立している場合が多い。（ただし、いい意味として取ればバリエーションに富んでいるとも言えるかもしれない。）気候や風土が異なるため、単純にドイツやスイスの様子をそのまま日本に取り入れることは困難ではあるが、国や地域ごとの景観に対する取り組みを理解し、わが国に生かすことのできる知恵を模索することは非常に重要であると感じた。

### おわりに

このたびの視察の機会を与えてくださった中村先生をはじめ、インフラストラクチャー研究会ならびにみなと総合研究財団の皆様には大変お世話になりました。また、多少のフライトプランの変更といったことはあったものの、大きな事故もなく全員が無事に笑顔で帰国できたことは、ガイドの高橋さんをはじめとするJTBの方々の手腕のおかげだと思っております。さらに、業界の第一線で活躍されている多くの技術者の方々と深い交流を持たれたことは、私にとって何よりの財産となりました。皆様に深く感謝申し上げます。